

## 子どもの自尊感情と体験の関係について

横山, 正幸  
福岡教育大学名誉教授

<https://doi.org/10.15017/19992>

---

出版情報 : 生活体験学習研究. 10, pp.53-62, 2010-01-20. 日本生活体験学習学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 子どもの自尊感情と体験の関係について

横山 正幸\*

## On the Relation between Self-Esteem and Daily Life Experiences

Yokoyama Masayuki\*

**要旨** 本論文は、子どもの自尊感情の実態と、自尊感情と体験の関係について、近年報告されている調査・研究をもとに検討したものである。結果として、最近の子どもの自尊感情は、従来、各方面から指摘されているように極めて低い傾向にあるということ、また、子どもの自尊感情の高低と体験、すなわち1)生活体験、2)手伝い体験、3)コミュニケーション体験、4)遊び体験、5)自己管理体験、6)被称賛体験などとの間には密接な関係があるということが明らかとなった。本論文では、こうした結果を踏まえ、最後に今後我々大人は子ども達の自尊感情を高めるために何をすべきか、基本的な視点について言及している。

**キーワード** 子ども、自尊感情、体験

### I. はじめに

自尊感情は、辞書的には「自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚」(遠藤由美, 1999)と定義される。類似の言葉に自分の能力や価値を確信する意味の「自信」、自分に対する肯定的な意識を意味する自己肯定感、自分は自分の力で適切に課題をこなすことができるという確信的な感覚を意味する自己効力感、自分はできるんだ、優れているんだという感覚を意味する有能感などいくつかある。これらの言葉は、辞書的な定義としては区別できるが、具体的なレベルで考えると同じような意味・内容を含んでおり、厳密な区別は難しい。そこで、人によっては、自尊感情と同義的な意味で「自信」や「自己肯定感」という言葉を用いている場合もある。

いずれにしても、自尊感情は精神的健康や適応の基盤をなす感覚で、自尊感情の高い子どもは精神的

に安定し、何ごとにも意欲的で前向きに生きようとする傾向にある。これに対して低い子は精神的に不安定で、生活に充足感がなく、ちょっとしたことで動揺したり、傷ついたり、時には好ましくない行動にはしったりする傾向があると言われている。子どもが夢や志をもって健やかに育っていくための最も重要な条件だと言ってよいであろう。

### II. 子どもの自尊感情の実態

近年、子ども達の自尊感情がかなり低くなっているということが教育関係者をはじめ、子どもに関わっている様々な人々からよく指摘されている。実際はどうかであろうか。

筆者は、いじめや不登校が日本のように深刻でない中国・新疆ウイグル自治区やトルコの子ども達の生活を明らかにするために1996年から繰り返し両地域を訪れ、臨地調査を行ってきた(横山正幸他、

\*連絡・別刷り請求先

〒811-4174 福岡県宗像市自由ヶ丘西町9-4 (9-4 Nishimachi, Jiyugaoka, Munakata-shi, Fukuoka-ken, Japan 811-4174)

メールアドレス yoko41@jcom.home.ne.jp

1998；横山正幸他，2003)。そして、その過程で自尊感情についても、折に触れ「君は、自分がダメな人間だと思うことがありますか」などと質問し、調べてみた。その結果、筆者がインタビュー調査をしたウイグルの子もトルコの子も、そのほとんどが「自分がダメな人間だと思ったことはない」ときっぱり答えていた。

例えば、トルコのキュタフヤという町で会った小学校5年生のタルハ君は躊躇することなく「僕のいいところは、髪の毛の色が少し黄色いところと、決めたことを一生懸命すること、それから困っている人を優しく助けること……」と明るく答えてくれた。一方、短所について尋ねると「ソーン、何だろう？」と考え込んでいた。

これと対照的に、日本の子ども達は「きみの良いところはどんなところかな」と尋ねても、さっと長所を挙げることができない子が多い。それが「良くないところは？」と聞くとたくさん出てくる。自分を肯定的に捉えることができないようなのである。

吉田達也(2002)は、子ども達の自己評価の傾向を探るために福岡県内の小学校3年生～中学3年生を対象に質問紙法で「自分のいいところはありますか」と「自分のよくないところはありますか」という質問をした。有効回答数は前者が1,612、後者が1,

606であった。2つの質問に対する回答の割合を見ると、「自分に良いところ」が「ある」と答えている子は「たくさん」「少し」を合わせて38%、「ない」が「あまり」「全然」を合わせて26%、残り36%は「わからない」と答えている。これに対して、「自分に良くないところ」が「ある」と答えている子は「たくさん」「少しある」を合わせて47%と、前者より高い割合を占めていた。吉田は、この結果から「子どもたちは自分の良いところよりも良くないところに目を向ける傾向が強く、自分の長所を把握していない児童生徒が多い」と結論づけている。

実際、福岡県(2001)の調査では、小学6年生で「自分は何をやってもダメな人間だという感じ」が「よく」ないし「時々」あるという子が合わせて48.4%を占めていた。同様の結果は、福岡県の宗像市教育委員会(2006)が実施した調査でも見ることができる。この調査では、「あなたは何をしてもダメな人間だと思うことがありますか」という質問に「よくある」「時々ある」「たまにある」「全然ない」の4件法で回答を求めているが、前3者を合計した割合は、6年生で66.7%という高い数値を示している。

東京都教職員研修センター(2009)も2008年に、小学校1年生～高校3年生まで計12,740名を対象に

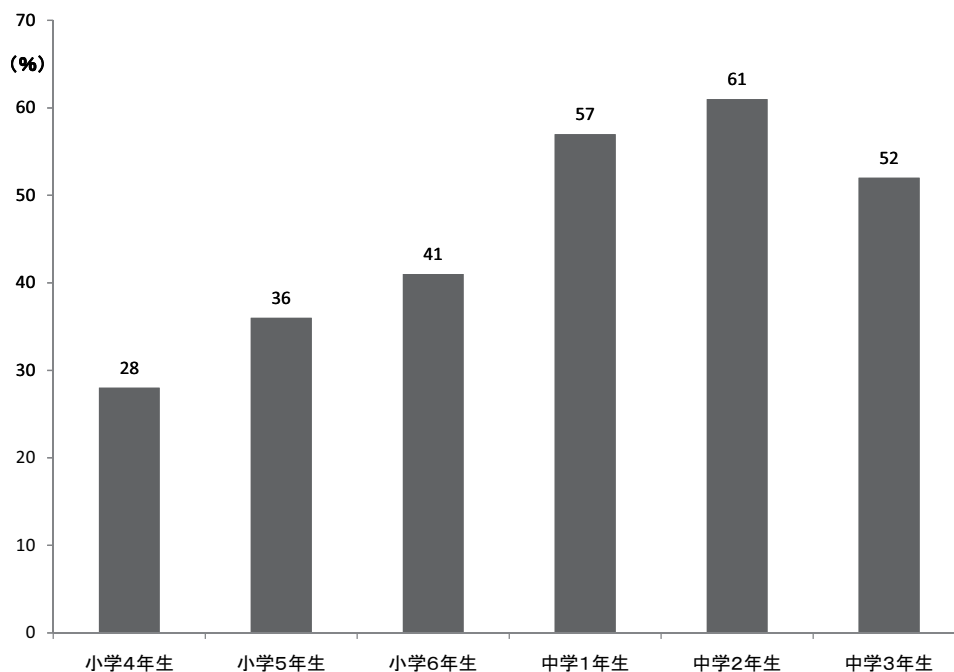


図1. 自分のことが好きだと「思わない」「どちらかというと思わない」という子の割合 (東京都教職員研修センター, 2009)

自尊感情について実態調査を行っている。それによると、「自分のことが好きだ」と「思わない」「どちらかというと思わない」という子が合わせて4年生では28%であるが、6年生では41%、中学2年生では61%にも達している。また、「私にはよいところがある」と「思わない」「どちらかというと思わない」という子も4年生で20%、6年生で30%、そして中学2年生では43%と高い割合を占めている。図1は、自分に好感をもっていない小学校4年生～中学3年生の子どもの割合を示したものである。

さらに、福岡県青少年アンビシャス運動推進室(2009)は、小学4年生、小学6年生、中学2・3年生計12,867人を対象に、ローゼンバーグ Rosenberg (1965) が作成した10の質問項目からなる自尊感情尺度を、子ども達にわかりやすい表現に翻訳したものをを用いて自尊感情の調査を行っている。その際、回答は「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法で行われた。また、各質問に対する回答「とてもそう思う」を4点、「少しそう思う」を3点、「あまりそう思わない」を2点、「まったくそう思わない」を1点、逆転項目については逆に1点、2点、3点、4点と重みづけし、その合計得点をもってそれぞれの子どもの自尊感情得点とした。したがって、それぞれの子どもの自尊感情得点は10～40点の範囲に分布することになる。福岡県は、こうした得点分布のちょうど真ん中の点、すなわち25点を超えて26点以上の子どもを自尊感情の高い子とした。その結果、

自尊感情の高い子の割合は小学4年生で44.1%、6年生で31.8%、中学2年生で18.1%、3年生で20.7%と、4年生ですでに5割を割り、中学生では20%前後という事実が明らかとなった。図2は、これを示したものである。

加島ゆう子 (2008) も福岡県と同じようにローゼンバーグ Rosenberg, M. (1965) の自尊感情尺度を用いて、小学生の自尊感情を調べている。対象としたのは兵庫県西宮市の37の市立小学校に在籍する1年生～6年生の児童24,849人であった。回答は「とてもそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」の4件法で、それぞれに3、2、1、0点(逆転項目については、0、1、2、3点)と重みづけをした。したがって、個々の子どもの自尊感情得点は0～30点の間に分布することとなる。この分布のうち0～13点を自尊感情低群、14～20点を中群、21～30点を高群とした。図3は、4、5、6年生について自尊感情の高い子と低い子の割合を示したものである。但し、加島の研究では、各学年の中群に属する子ども達の人数を抜き、高群と低群の合計数を母数として両群の割合を算出している。したがって、各学年の対象児全体を母数とした場合より両群とも数値はかなり高くなっているのではないかと推測される。それにしても、この図からは自尊感情の高い子より低い子の割合が顕著に高いことを読み取ることができる。

国際的な比較研究の結果を見ると、日本の子ども達の自尊感情の低さはさらによくわかる。例えば、

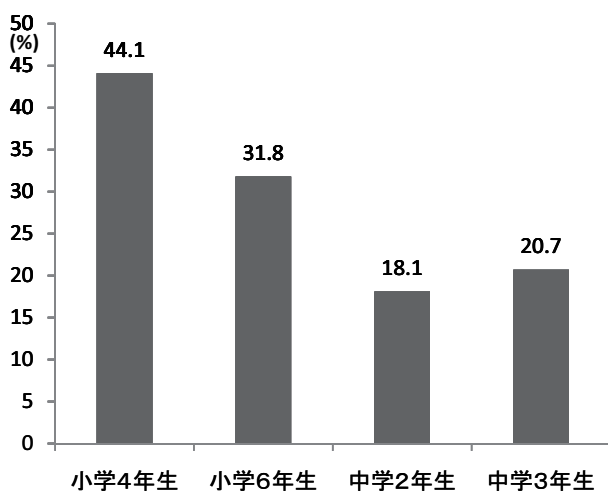


図2. 自尊感情の高い子の割合 (福岡県青少年アンビシャス運動推進室, 2009)

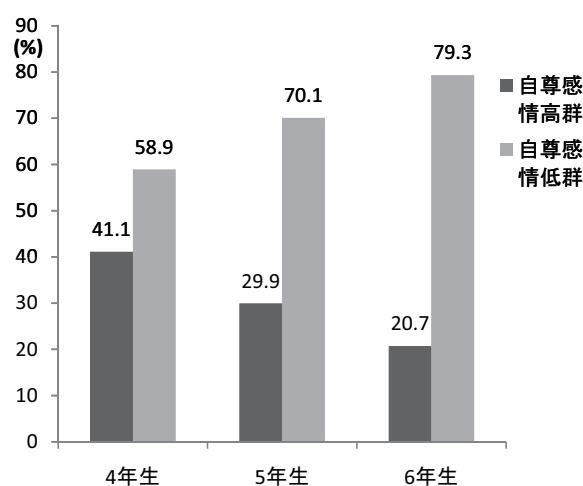


図3. 自尊感情の高い子と低い子の割合 (加島ゆう子, 2008)

日本青少年研究所 (2001) が日本、韓国、アメリカ、フランスの中学2年生と高校2年生を対象に行った調査によると、「あなたは自分自身に対してどれだけ満足しているか」という質問に対して、「非常に満足」「満足」と答えた生徒の割合は、韓国37.2%、アメリカ88.8%、フランス70.7%に対して、日本は23.1%に過ぎない。日本は他国と比べて自分自身に満足している子が顕著に少ないのである。

河地和子 (2003) も日本、スウェーデン、アメリカ、中国の中学生 (15歳) を対象に「自信度」について調査をしているが、結果は、上述の調査と同様の傾向を示している。すなわち「全体として、私は自分に満足しているような気がする」という質問に対して「そう思う」と回答している割合はスウェーデン85.1%、アメリカ78.2%、中国61.8%に対して日本は41.0%であった。また、「私は自分に対して積極的な評価をしていると思う」については、「そう思う」と回答している割合がスウェーデン83.2%、アメリカ77.9%、中国92.7.8%に対して日本は40.0%に過ぎない。

アプリミティら (2004) は、中国・新疆ウイグル自治区の区都ウルムチに住むウイグル人の小学5、6年生を対象に、福岡県と同じ質問で調査を行っている。それによると、「自分は何をやってもダメな人間だ」という感じが「よく」ないし「時々」あるという子の割合は合わせて都心部の子で19.9%、郊外の子で15.9%であった。どちらにしても日本の子ども達に比べてその割合は顕著に低い。

また、李仲濱ら (2005) は、中国・南京市の小学校の4、5年生計491名を対象に、ローゼンバーグ Rosenberg (1965) が作成し、山本真理子他 (1982) が邦訳した自尊感情尺度の表現を中国の小学生にわかりやすい言葉の一部変更して使い、自尊感情を調べている。回答は「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらともいえない」「少しあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で求め、それぞれの回答に対して0点、1点、2点、3点、4点の重みづけをした。したがって、得点は0 (最低) ~ 40 (最高) 点の間に分布することになる。このようにして求めた対象児の自尊感情の平均点は、23.4点 (標準偏差6.53) で、中央値20点を3.48点上回っていた。また、得点の分布状態をみると0~10点が2.4%、11~20点

が32.6%、21~30点が49.3%、31~40点が15.5%で、20点を超え21点以上の子が64.8%を占め、0~10点という低得点の子は極めて少なかった。

上述の諸報告は、調査の方法が異なるので単純に比較することはできない。しかし、それでもこれらの結果から見えてくるのは、日本の子ども達の自尊感情が他の国の子ども達に比べて著しく低い傾向にあるという事実である。

### Ⅲ. 自尊感情と生活体験の関係

このように日本の子ども達の自尊感情が驚くほど低い背景には何があるのだろうか。筆者が思うには、この問題には生活体験、人間関係体験、コミュニケーション体験、自己管理体験など、子どもの発達過程で必要な様々な体験の欠損が深く関係しているのではないかということである。

従来、自尊感情の形成には、乳幼児期に養育者からしっかり愛されているという感覚をもっていること、親や先生から、自分は認められているという気持ちがあること、「自分はできた!」という達成感があること、「自分はこの集団の仲間なんだ」「仲間から受入れられている」という所属感があること、自分は必要とされている存在だという気持ちがあること、などが大事だと言われている。

これらは、いずれも一時的な教育や指導のもとで得られるものではない。日々の何気ない生活のなかで体験的に得られるものである。長年、野外活動など子どもの体験活動に関わってきた澁谷健治 (2005) は、その経験から「子どもの自信の獲得には体験を通して充実感や達成感、自分を価値ある存在として捉えられる自尊感情や自分自身の有用感などを感じる体験が必要である。」と述べている。

実際、自尊感情と体験の関係を検討したこれまでの調査・研究は両者が密接な関係にあることを明らかにしている。以下では、それらの調査・研究を紹介してみたい。

#### (1) 福岡教育大学児童心理学研究室(2002)の研究

この研究は、筆者の指導のもと魚谷江毅、古賀由衣、遠山千里、柳田梨沙の4人の学生が学校心理学特殊実験という授業で半年かけて行った共同研究である。研究の目的は子どもの自尊感情と生活体験の

関係を明らかにすることであった。調査の対象は小学校6年生303名である。自尊感情の測定についてはローゼンバーグ Rosenberg (1965)が作成し、星野命 (1970) が邦訳した10の質問からなる尺度を用いた。なお、回答は「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそうは思わない」の4件法をとった。生活体験については、文部省 (1999) がまとめた「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」を参考に、遊び、対人関係、自己管理、手伝い、家事、賞罰などの体験の程度を問う質問紙を独自に作成し、用いた。次に自尊感情と生活体験の関係を検討するにあたっては、まず、自尊感情尺度の各質問に対する回答「とてもそう思う」を3点、「少しそう思う」を2点、「あまりそう思わない」を1点、「まったくそう思わない」を0点、逆転項目については逆に0点、1点、2点、3点と重みづけし、その合計得点をもってそれぞれの子どもの自尊感情得点を算出した。その結果、対象児の自尊感情得点は1～26点の範囲に分布していた。そこで、この中から得点の高い子(得点20以上)と得点の低い子(得点12点以下)を抽出し、それぞれ自尊感情高群、自尊感情低群とした。そして、この両群について生活体験の実態を比較した。結果は、図4～図14に示すとおりである。

1) 生活体験と自尊感情の関係

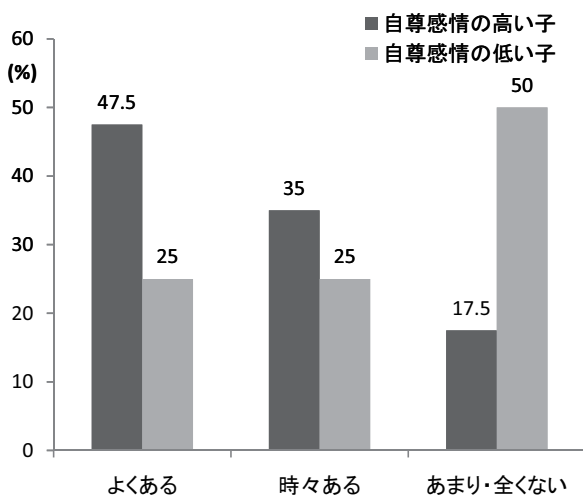


図4. 「肉や魚を焼いたことがありますか」という質問に対する割合

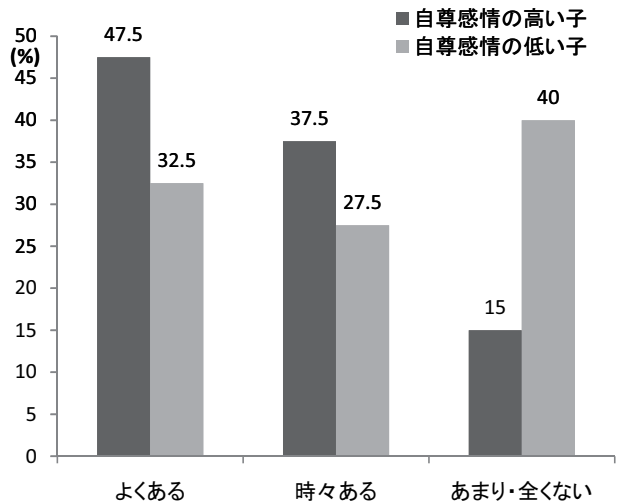


図5. 「洗濯をしたことがありますか」という質問に対する割合

2) 手伝い体験と自尊感情の関係

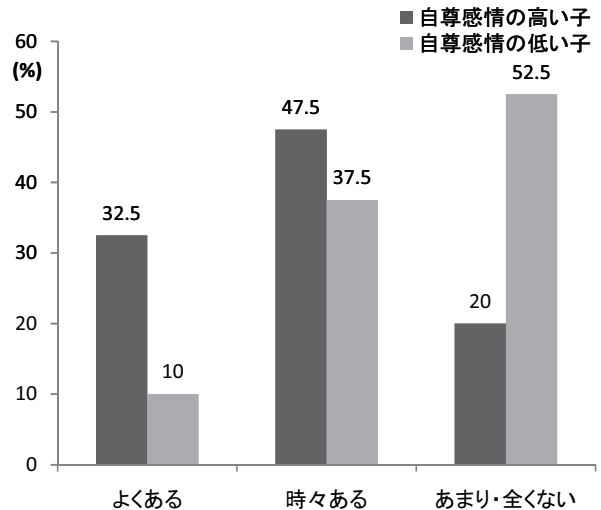


図6. 「お使いをしたことがありますか」という質問に対する割合

3) コミュニケーション体験と自尊感情の関係

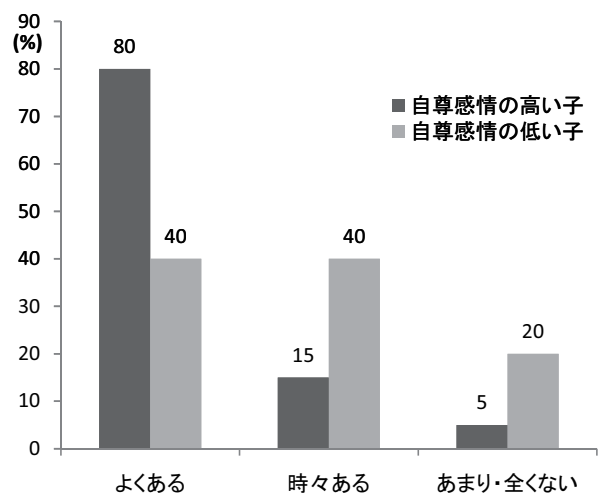


図7. 「家の人の留守中に電話を受けた時、その内容をきちんと伝えたことがありますか」という質問に対する割合

4) 遊び体験と自尊感情の関係

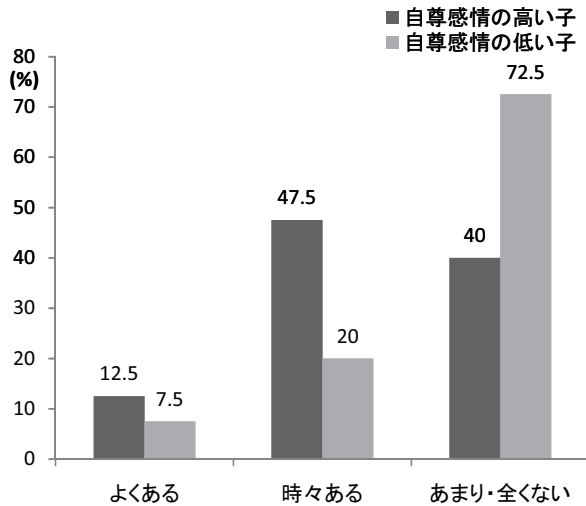


図8. 「リーダーになって大勢で遊んだことがありますか」という質問に対する割合

5) 自己管理体験と自尊感情の関係

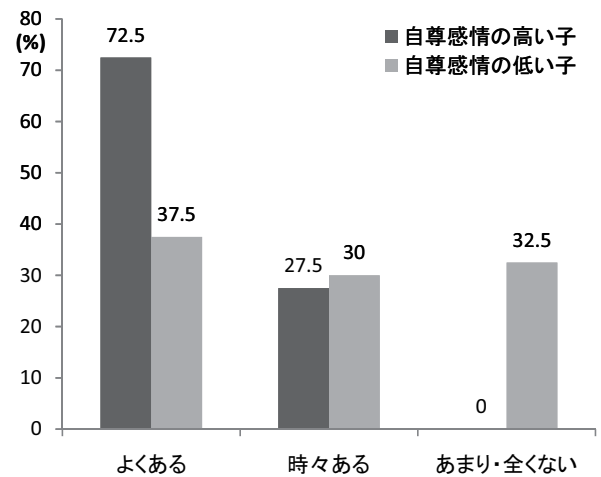


図11. 「ケガをした時、自分で手当てをしたことがありますか」という質問に対する割合

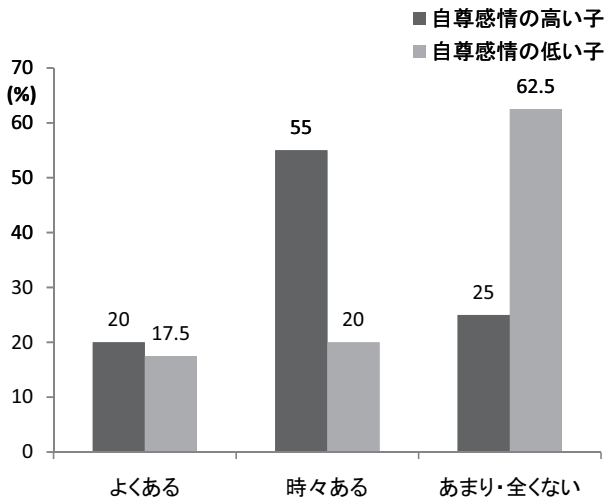


図9. 「家族みんなで遊んだことがありますか」という質問に対する割合

6) 援助体験と自尊感情の関係

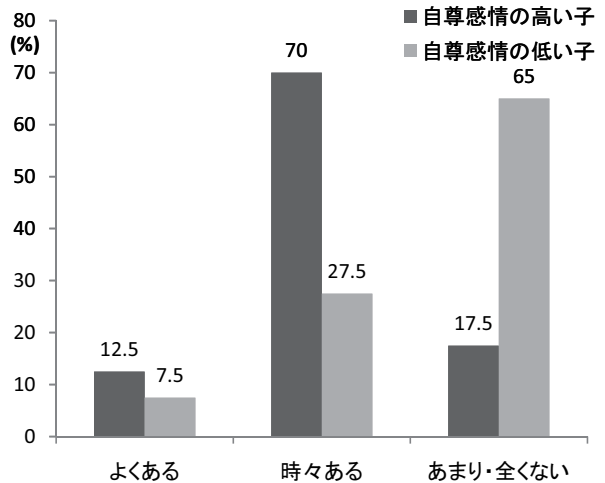


図12. 「困っている友達を助けたことがありますか」という質問に対する割合

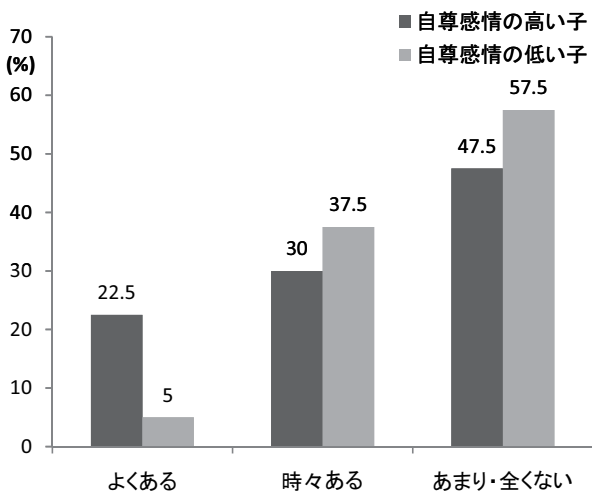


図10. 「木に登ったことがありますか」という質問に対する割合

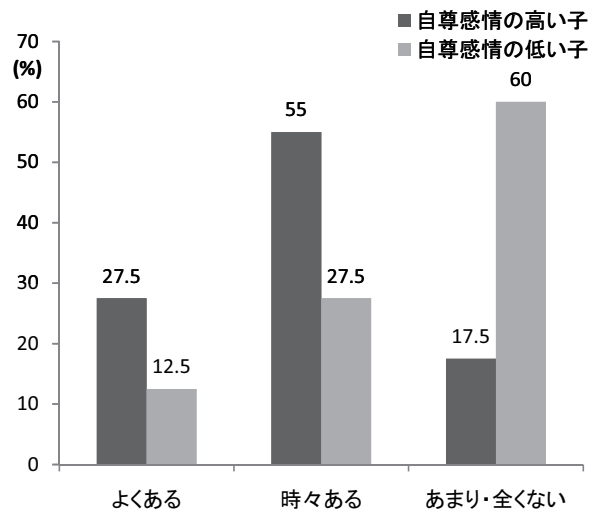


図13. 「友達に勉強を教えてやったことがありますか」という質問に対する割合

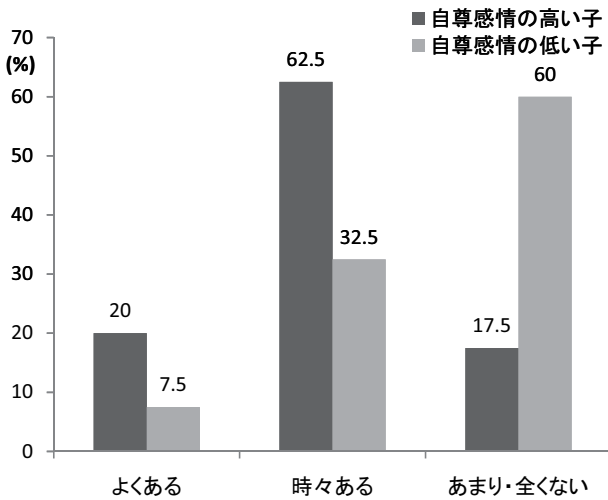


図14. 「友達がよくないことをした時、注意したことがありますか」という質問に対する割合

7) 被称賛体験と自尊感情の関係

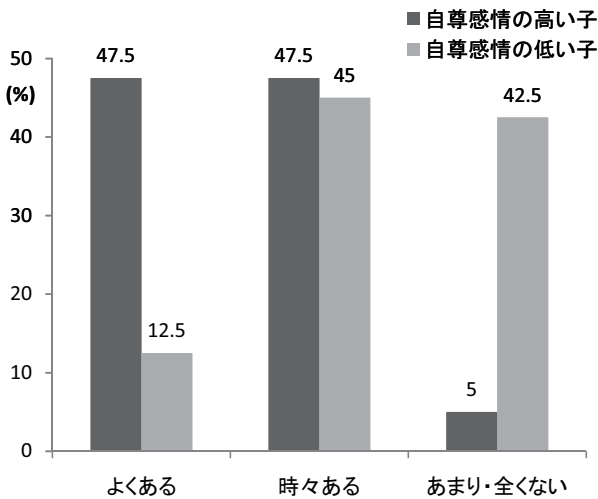


図15. 「家の人にほめられたことがありますか」という質問に対する割合

これらの結果は、自尊感情の高い子は生活体験、手伝い体験、コミュニケーション体験、遊び体験、自己管理体験、援助体験、被称賛体験のいずれにおいても自尊感情の低い子よりよく体験している傾向にあることを示している。

(2) 福岡県青少年アンビシャス運動推進室の研究 (2005, 2009)

福岡県青少年アンビシャス運動推進室 (2009) は、で説明したようにローゼンバーグ Rosenberg, M. (1965) の自尊感情尺度を使い、自尊感情の実態調査を行っているが、その際、子どもの達の生活実態についての調査も実施した。そして、自尊感情と子

どもの生活のあり方との関係を検討している。図16は、その結果を示したものである。なお、数値は調査対象とした小学4年生と6年生を混みにして算出したものである。また、凡例の該当群というのは横軸の各項目の内容に該当する子ども達を、非該当群は該当しない子ども達を意味している。例えば、「10時までに就寝」という項目では10時までに寝ている子は該当群、10時を過ぎて寝ている子は非該当群ということになる。このようにして、各項目について該当群と非該当群で自尊感情の高い子の割合に違いがあるか否か比較している。この図を見ると、項目によって該当群と非該当群の割合の差に大小はあるものの一貫して該当群のほうが非該当群より自尊感情の高い子の多いことがわかる。すなわち、TV視聴は1時間以下、外での遊びが1時間以上、そして勉強を1時間以上し、10時までに寝ている子のほうがそうでない子より自尊感情の高い子が多い。また、5人以上の友達があり、授業中もよく発言し、お手伝いをし、ほめられ、叱られた体験のあまりない子のほうがそうでない子より自尊感情の割合は高い。

福岡県青少年アンビシャス運動推進室 (2009) は、同じ調査で「アンビシャス広場」の活動に参加している子と、参加していない子で、自尊感情の高い子の割合に違いがあるか否かについても調べている。「アンビシャス広場」の活動というのは、福岡県が2001年から全県下で展開している青少年アンビシャス運動の取組の1つである。時間があっても友達と外で遊ぶこともなく、家の中でテレビを見たり、ゲームをしたりして過ごしている子を家から出し、大勢の友達と時間を忘れ、夢中になって遊ぶようにさせるための方法である。放課後や休日、そこに行けば大きい子も、小さい子もあり、遊びや様々な活動がある、そして、子ども達の遊びや活動を暖かく見守り、応援してくれるボランティアのおじちゃんやおばちゃんがいる、そんな地域のなかの子ども達の「居場所」が「アンビシャス広場」であり、そこでの活動のことを「アンビシャス広場」の活動という。図17は、その結果を示したものである。これを見ると、一般の児童・生徒、すなわちアンビシャス広場の活動に参加していない子ども達より参加している子ども達のほうが自尊感情の高い子の割合が高い。仲間と遊ぶことは、子ども達の自尊感情と深く関わっているようである。



なお、福岡県青少年アンビシャス運動推進室では、2005年にも別の側面から遊びと自尊感情の関係を明らかにしている。この研究では、小学校4年生～6年生の子ども達を対象に、子どもの心の健康と生活習慣についてアンケート調査を行った。そして、その中の遊びについて「1日の外遊び時間が1時間30分以上で、1日のテレビ視聴時間が1時間30分以下」の子ども達と「1日の外遊び時間が30分以下で、1日のテレビ視聴時間が3時間以上」の子ども達で、「自分はダメな人間だと思うことがありますか」という自尊感情に関する質問に対し、「いつもある」と答えている子どもの割合に違いがあるかどうかを比較・検討した。その結果を示したのが図18である。

これを見ると、外遊び群のほうが自尊感情の低い子の割合が明らかに低い。

(3) 加島ゆう子 (2008) の研究

加島ゆう子 (2008) は、前述 で説明した小学生を対象としての自尊感情の調査に合わせて生活実態についての調査も実施している。そして、この中で睡眠についても調べ、子どもの自尊感情と就寝時刻の関係を明らかにしている。図19がその結果である。凡例の自尊感情の高い子というのは、自尊感情得点の分布0～30点において21～30点の子ども達を、自尊感情の低い子というのは0～13点の子ども達を示している。この図によると、自尊感情の高い子のほ

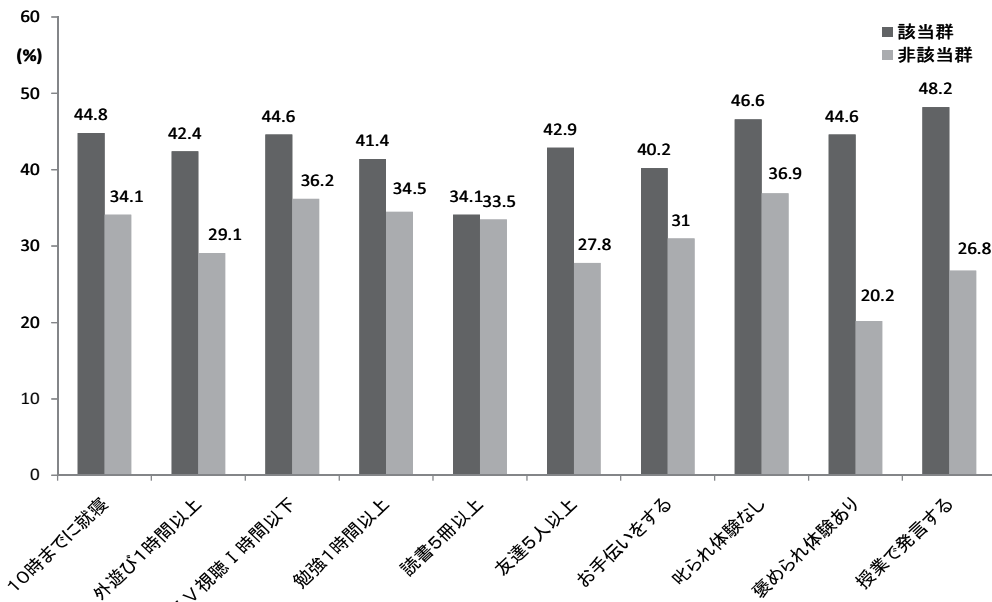


図16. 生活実態と自尊感情の高い子の割合の関係 (福岡県青少年アンビシャス運動推進室, 2009)

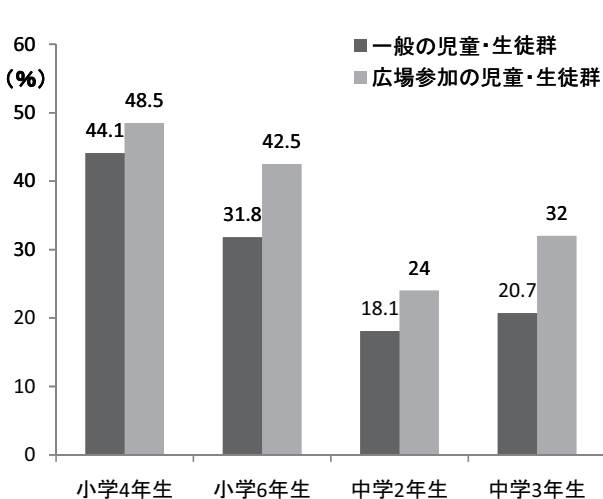


図17. アンビシャス広場の活動への参加の有無と自尊感情の関係 (福岡県青少年アンビシャス運動推進室, 2009)

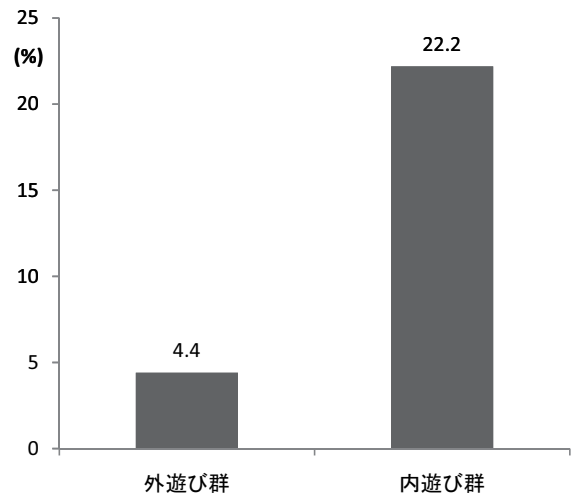


図18. 「自分はダメな人間だと思う」という子の割合と遊びの関係 (福岡県青少年アンビシャス運動推進室, 2005)

うが低い子より明らかに早く寝る傾向にある。これは、(2)で紹介した福岡県青少年アンビシャス運動推進室 (2009) の調査結果、すなわち10時前に寝る子のほうがそうでない子より自尊感情の高い子の割合が高いという事実と基本的に一致するものである。

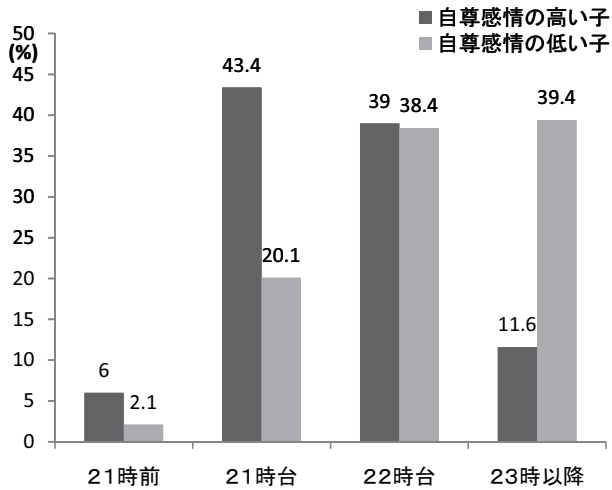


図19. 小学生の自尊感情と就寝時刻の関係 (加島ゆう子, 2008)

(4) 横山正幸 (2006) と河地和子 (2003) の研究

パフォーマンス学を専門とし、多くの教師を指導してきた佐藤綾子 (2004) はその著書「キレイな心を育てる！」の中で自尊感情とコミュニケーションの関係に関して次のように述べている。「私は考えるところがあって社会人の学校、『佐藤綾子のパフォーマンス学講座®』を主宰し、もう11年になります。そこには小中学校の先生たちもたくさん入学しているのですが、ほとんど共通して言うことは、『あなたの好きなもの、得意なことを言ってごらんとっても、さっと言える子は少ない』ということです。(中略) けれど子供たちはそれぞれの自己表現をもって、しかもこの自己表現が賞賛によって満たされたとき、ぐんと自信をもつという心理構造をもっているのです。(中略) 自分のトクイワザを、いつでもどんな瞬間でもさっと言える子にしてあげるのです。そのことが子供に自信を与えていきます。」

実際そうである。北九州市立香月小学校 (当時) の菊池省三教諭 (2006, 2008) は、コミュニケーション能力の高い子を育てることこそ、学級におけるあらゆる活動の基本であると捉え、6年生の子ども達を対象に積極的にその育成に努めた。その結果、授業が活発化し、生き生きしたものとなっただけでな

く、子ども同士の間関係も極めて豊かなものとなっていた。横山正幸 (2006) は、このことに注目し、前述の福岡県青少年アンビシャス運動推進室が用いたローゼンバーグ Rosenberg, M. (1965) の自尊感情尺度を使い、この子ども達の自尊感情を調べてみた。その結果、このクラスの子どもの自尊感情得点の平均は27.96で、標準の25点より、2.96高かった。また、26点以上 (福岡県青少年アンビシャス運動推進室の調査で「自尊感情の高い子」と考えた群) の子ども達の割合は、70.9%にも達していた。図20は、この数値を福岡県青少年アンビシャス運動推進室 (2009) の調査で対象となった県全体の6年生の結果と比較したものである。これを見ると、コミュニケーション体験を豊かにした子ども達のほうが、自尊感情の高い子の割合が明らかに高いことがわかる。

コミュニケーションと自尊感情の関係を示すデータとしては、他に河地和子 (2003) の報告がある。

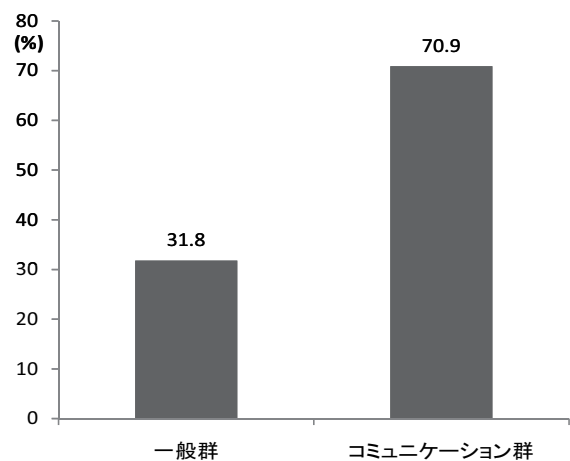


図20. コミュニケーション体験群と一般群で比較した自尊感情の高い子の割合 (横山正幸, 2006)

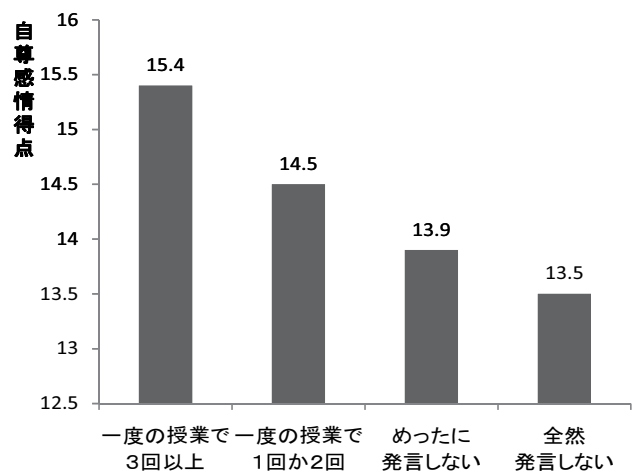


図21. 自尊感情と授業中の発言回数との関係 (河地和子, 2003)

彼女は中学3年生を対象に「授業中、どれくらいの割合で質問したり、意見を言ったりしますか。」という質問をし、「一度の授業で三回以上」「一度の授業で一回か二回」「めったにしない」「全然しない」の4つの回答の中から1つを選んでをつけるよう求めた。結果は、前頁の図21のとおりである。これを見ると、授業中発言回数が多いほど自尊感情が高くなる傾向にあることがわかる。

以上の調査・研究を総合して言えることは、子どもの自尊感情と、1)生活体験、2)手伝い体験、3)コミュニケーション体験、4)遊び体験、5)自己管理体験、6)被称賛体験といった体験との間には密接な関係があるといことである。但し、いずれの調査・研究も研究方法として因果関係を明らかにするための手法はとられていない。したがって、厳密には体験が自尊感情の程度に直接作用する要因であると単純に断定することはできない。自尊感情の高い子は、高いが故に低い子より自ら意欲的に体験するという面もあり得るからである。しかし、常識的な感覚からすると、体験は子どもの自尊感情のあり方に強い影響を与えていると見てまちがいないであろう。

#### IV. おわりに

子ども達の自尊感情を高めることが、今や教育界の大きな課題になってきている。では、具体的にどうしたらよいのであろうか。特別の方法があるわけではない。本論文で明らかになった事実をもとに言えば、寝るべき時間に寝、仲間と遊んだり、家の手伝いをしたり、何か良いことをして誉められるといった、毎日の生活のなかでなされる何気ない体験の積み重ねが大切なのである。ところが、現実には学習塾や習いごとを追われ、外で仲間と元気に遊ぶこともほとんどない、就寝時刻は遅い。家の手伝いをしたり、幼い子の面倒をみる体験も欠けている。欠点を指摘されることはあっても、人の役に立って誉められる機会は滅多にない。これでは自分が有能な、大切な存在だという感情が育つどころか、心の健康は悪化し、自立そのものが危うくなる(横山正幸, 2008)。子育ての難しい時代ではあるが、状況を改善するために、今すべきことは親はもちろん、教師も地域の人々も、大人皆が心して子ども達が本来の子どもらしい生活ができるように努めることである。

#### 引用文献

- アプリミティ,グリシェン他 2004 ウィグルの子ども達の心の健康と生活 教育実践研究 第12号 219-226.
- 遠藤由美 1999 自尊感情 中島義明他(編)心理学辞典 有斐閣 東京
- 加島ゆう子 2008 小学生の自尊感情と親の子育て感との関連性に関する研究 (武庫川女子大学大学院修士論文) (未公刊)
- 河地和子 2003 自信力はどう育つか 朝日出版社
- 菊池省三(監修)2006 コミュニケーション大事典 あらき書店
- 菊池省三 2008 子どもが変わる! 大人も変わる! コミュニケーション授業 株式会社フラウ
- 佐藤綾子 2004 キれない子を育てる! 講談社
- 澁谷健治 2005 自然体験から自信を育てる 児童心理 第59巻 第10号 74-77.
- 東京都教職員研修センター 2009 自尊感情や自己肯定感に関する研究 平成20年度東京都教職員研修センター紀要 第8号 3-26.
- 東京都教職員研修センター 2009 「子供の自尊感情や自己肯定感を高める教育」の研究について (報道発表資料)
- 日本青少年研究所 2001 新千年生活と意識に関する調査
- 福岡教育大学児童心理学研究室 2002 自尊感情と生活体験との関係 (福岡教育大学平成13年度学校心理学特殊実験発表資料)
- 福岡県 2001 青少年に関する意識及び行動調査
- 福岡県青少年アンビシャス運動推進室 2009 平成20年度自尊感情結果について (報道発表資料)
- 福岡県青少年アンビシャス運動推進室 2005 平成16年度青少年アンビシャス運動地域連携事業第1年次中間報告書
- 星野命 1970 感情の心理と教育 (一、二) 児童心理, 24, 1264-1283 1445-1477.
- 宗像市教育委員会 2006 宗像市の小学生の生活と意識の実態
- 文部省 1999 子どもの体験活動等に関するアンケート調査
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認識された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30 64-68.
- 横山正幸(編著) 1998 いじめのない子どもたちの世界 北大路書房
- 横山正幸・横山あづま 2003 学校大好き! 笑顔輝くトルコの子ども達 清流出版
- 横山正幸 2006 コミュニケーション体験が子どもの自尊感情に及ぼす効果について (未発表資料)
- 横山正幸 2008 現代の子どもの心の危機 日本小児科医学会報 第36号 95-97.
- 吉田達也 2002 自尊感情の変容に関する実践的研究 (福岡教育大学大学院修士論文) (未公刊)
- 李仲濱他 2005 中国・南京市の小学生の自尊感情について 教育実践研究 第13号 153-159.
- ローゼンバーグ Rosenberg, M. 1965 Society and adolescent self-image. Princeton University Press.